

## 天安門事件20周年に見る中国の現実と日中関係

2009年6月

血染めのシャツ。それが、1989年6月4日の朝、私が北京大学構内で目にした紛れもない現実だった。5月下旬以降、天安門広場の学生運動は明らかに衰退の兆候を示し始めていただけに、当局の対応はいかなる言説を弄しても正当化できるものではなかった。

従って、事件直後、我が国を含む各国で、「中国崩壊説」がある種の期待感をもって広く語られたのも無理からぬことではあった。しかし、私は、この悲劇的事件にもかかわらず、改革開放の大きな流れが変わることはあるまいという趣旨の報告書を、当時所属していた外務省に提出した。

あれから20年。現在、我々の前には複雑化し、重層化した中国がそびえ立っているが、その姿は「3つの現実」によってとらえることが可能だ。

第一の現実とは、政治改革の停滞が続く中国、である。中国指導部は、現在に至るも一貫して政治改革を行ってきたと主張しているが、それは共産党体制の維持を前提とするもので、内容的にも行政改革と言うべき性格のものである。

第二の現実とは、経済大国化の道をひた走る中国、である。事件直後の制裁を耐え抜いた後、中国はなりふり構わず経済発展を追い求めてきた。その結果、GDP及び貿易総額で世界第三位という経済大国の地位を手に入れた。

そして、第三の現実とは、民主化の停滞や所得格差のさらなる拡大などを、実は余り問題視しない中国の人々の存在、である。権力と一体化することで多くの既得権益を手に入れた中間層は、民主化推進の中核的勢力とはなりえない。また、劣悪な環境下にある農民工ではあるが、彼らの間に共通の社会不満はない。加えて、頻発する抗議行動にもかかわらず、その同時多発化を抑える程度の権力基盤を共産党政権は依然有している。

当然のように天安門事件を黙殺した4日の『人民日報』は、その第一面で軍への配慮と米中首脳電話会談実施を報じる記事を同時掲載することによって、過去20年間の路線を肯定してみせたが、これは当面の中国の未来像でもある。

このような中国と良好な関係を構築することが我々の現実的課題だ。そこで、わが国政府は現在中国との間で戦略的互惠関係の構築を進めているが、「中国にとって魅力のある国」づくりこそ、課題実現の基礎であると私は考える。勿論、これは決して日本の主体性放棄を求めるものではない。例えば、中国が期待する高い技術力は、我々日本人自身の生活の質を高めるものに他ならず、国際社会での発言力や影響力を強めることにも直結する。魅力のある国であってはじめて、中国は隣国からの様々な苦言にも耳を傾けるだろう。